戦姫絶唱シンフォギアFS

ケントxv

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《先導　朔弥》はツヴァイウィングのライブ事件の際に、完全聖遺物《ギャラルホルン》に資格者として選ばれる。それによって見せられたのは残された平行世界はこの世界しかない事、世界を守るカギは幼馴染の《立花　響》だという事を知る。

朔弥はこの世界と響を守るために《フェアリーシールダー》として動き始める。

読む専だった私が立花響杯なる規格に参加したい。という思いだけで書いている作品です。

目次

特別編
特別編：暁切歌誕生日 1
特別編：風鳴翼誕生日 4
戦姫絶唱シンフォギア編
第1話 9
第2話 14
第3話 19
第4話 26
第5話 33
第6話 39
第7話 45
第8話 50

特別編

特別編：暁切歌誕生日

今日は〝Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．〟の仲間の一人《暁　切歌》の誕生日だ。
そして彼女の親友である少女《月読　調》は最高の誕生日にしてあげようと燃えていた。そんな調の買い物に付き合い、荷物持ちをしているのが僕《風鳴　朔也》と《風鳴　翼》だ。他のメンバーは飾り付け担当の《立花　響》と《小日向　未来》、時間まで切歌のエスコートをする担当が《雪音　クリス》と《マリア・カデンツァヴナ・イヴ》である。ついでに僕の親友にして僕が〝ＦＳ〟により女になったため唯一の男、《小日向　聖夜》は大学の授業があるとかで準備は不参加である。まあ、後でケーキを買ってくる役目があるわけだが・・・

「翼さん、朔弥さん、次はお肉の所に行きます」

「了解した」

「今回僕たちは荷物持ちだから、気にせず進んでいいからね」

調は最高の料理を振る舞うために食材を吟味しているようだ。ついでにメニューは〝ハンバーグ〟らしい。なんでも主賓自らの要望らしい。

「うん、これなら切ちゃんも満足できる物が出来る」

「よし、物が決まったなら会計してしまおう。時間もないからな」

「はい！」

いい食材が決まったようなので会計を促す。急がないとエスコート組が戻ってきてしまう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ただいまデース！」

と切歌の元気な声が聞こえてくる。

「ただいま！」

「おじゃまします」

それに続くようにマリアとクリスの声も聞こえてくる。

「お帰り、切歌、マリア、クリス」

「あれ？朔弥さんだけでデスか？他のみんなは？」
「僕はエスコートを仰せつかったのさ。マリアとクリスは先に行ってくれ。切歌は目をつぶって」
「了解デース」
　元気な返事と共に目をつぶる切歌。
「それじゃ先行ってるわね」
　とマリアとクリスもリビングに向かう。
「それじゃ、参りましょうか？姫？」
「出たデス！〝リディアンの王子様〟」
「いい加減その二つ名はどうにかなんないのか？」
「朔弥さんがそのキザキャラを直さないとだめだとと思いますよ？」
　そんなにキザかな？内心思いながらエスコートする。
「ついたぞ」
「目を開けていいデスか？」
「ああ、良いぞ」
　そうして切歌が目を開けるとリビングが普段の姿から一変していた。晴れやかな装飾に【切歌！お誕生日おめでとう!!】というメッセージボードがあった。
「せーのっ！」
「「「「「お誕生日おめでとう」」」」」
　そして皆で一斉に〝おめでとう〟と言葉を贈る。
「みんなありがとうデース!!」
「さて、本日のメインディッシュ！調ちゃんによるごちそうだよ!!」
　と響の掛け声で調と未来が次々料理を運んでくる。
「これ全部調が作ったんデスか？」
「切ちゃんに喜んでもらいたくて・・・」
「調～」
　感極まったのか調べに抱き着く切歌。嬉しそうな調。２人を見て微笑ましく思う一同だった。
『ピーンポーン』
　そこにインターホンがなる。

「お、ようやくケーキの到着か」
「兄さん！遅い〜」
「悪かったって、これでも講義終わってすぐに買いに行ったんだからな！」
と聖夜も到着し誕生日パーティーは盛り上がっていった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
パーティーが終わりそれぞれが解散するなか僕は切歌に声をかける。
「切歌！ちょっといいか？」
「なんですか朔弥さん？」
「誕生日とは別にプレゼントだ」
そうして、手渡したのは〝一つの弾丸〟…を模したキーホルダー。
「なんかクリス先輩の方が似合いそうなキーホルダーですね。」
「かもしれないが切歌に用意したので間違いないぞ？どんなつらい逆境すら跳ね返す勇気をくれるお守りだ。できれば常に持っててくれると嬉しいな」
「ありがとーデス！朔弥さんがそういうなら常に持ち歩くようにするデスよ」
「おう！よろしくな！」
「それじゃ、改めておめでとう！切歌」
こうして切歌の誕生日は終わっていくのだった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「クルースニク…ケイショウ」
「ヤツラノコウリンマデニスベテノケイショウヲイソグノダ！シカクシャヨ」

特別編：風鳴翼誕生日

５月２５日当日、世間では〃風鳴翼バースデーライブで盛り上がろうとしていた。もちろんシンフォギア装者達も会場の特等席で観覧するようだ。だが…

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ＡＧノイズの反応検知！」
「付近の住民の避難誘導いそげ！」
〃ＡＧ（エンジェル）ノイズ〃は通常のノイズに小さく羽が生えており、被害にあった人はまるで天に昇るかの様に恍惚とした表情になりそのまま蒸発していくのだ。
このノイズはイブ率いる十大天使が使役しており、響達はつい先日まで奴らと死闘を繰り広げていた。
「数は少数…　ですが天使が潜んでいる可能性も」
「装者達を呼び戻「待ってください」朔弥君？」
「今日は翼の誕生日です。みんなには翼のライブに集中してほしい。だから、僕が出ます」
「まて朔弥君今君に戦う力は…」
「行かせてやんな風鳴司令」
「君は環さん!?なぜあなたが？」
僕たちの前に現れたのは〃海宝環〃かつてＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．の前身、特異災害対策機動二課の時代にシンフォギアとは別のノイズとの対抗手段の研究に奔走していた人で現在僕の手助けをしてもらっている。
「この小僧には私たちの研究に付き合って貰っててな」
「朔弥君を？」
「そう、ある日此奴が自分で私たちのところに来て言いやがったんだ『僕に戦う力を貸してください』ってな」
「僕は力を失った。それでもみんなが戦っているのにただ指をくわえて見ていることしか出来ない。そんなのはお断りだ！」
「そして此奴と私たちで完成させたのが…」

◎

「良いか朔弥？スーツの起動時間は現状１５分だ。訓練道理に出来れば余裕だが」
「十大天使の出現の可能性を捨てきれない以上油断は禁物だ」
「了解」
そうして僕の新たな力が起動音を響かせる。
『翼…本当なら僕も君のライブに行きたかったけど、それは今度にとっておくよ。今は』
「さあ、来いノイズども！今日ここが新たな僕のデビューライブだ！」
そうして僕はＡＧノイズへと突撃して行った。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◎ｓｉｄｅ響◎

「いや～、今日の翼さんは絶好調だね？」
「確かに、今日の翼さん楽しそう」
「だな。先輩のライブは何度も見てるが今日はとびきりだ」
そう絶賛するのは響・未来・クリスだ。
「マリアも来れたら良かったのに」
「しょうがないデスよ。マリアは別の仕事が入ってるって」
調・切歌は仲間の一人マリアも一緒に来れなかった事を残念がっていた。
「朔弥も急用とかでこれないいってたしな？」
そういうのは未来の兄で朔弥の親友、聖夜だ。
『みんなありがとう！改めて今日は私のバースデーライブにようこそおいでくださいました！！』
翼が挨拶すると会場がオー！！と盛り上がる。
「さすが翼さん、今日も満員御礼だ」
『最初から全速力だったがみんなついて来てる？ここからも飛ばして行くからよろしくね！！』
「「「「「オオーーー！！」」」」」

解除がさらに盛り上がる。
『さて、では次の曲はこれだ!!』
　そして曲が流れ出す。
『来るがいい。マリア!!』
『見せて貰うわよ。戦場に冴える抜き身の貴方を!!』
　ＢＧＭ☒不死鳥のフランメ☒
「ええーーマリア!!」
「今日の仕事ってこれだったデスか?」
　マリアのサプライズ登場に会場も大盛り上がりとなる。そして曲が終わった。
『では改めて紹介しよう!スペシャルゲスト・・・マリア〜〜〜!!』
『みんなありがとう。そして翼、誕生日おめでとう。こんな記念すべきライブに呼ばれたことうれしく思うわ』
『ああ、私も来てくれて嬉しいぞ』
『私たちのデュエットもこれで二回目、とても嬉しい気持ちよ』
『ああ、またともに歌い明かしたいものだ』
　彼女らの会話に会場がざわめき出す。それをマリアがキャッチする
『迂路いたえるな!!次は”ＬＩＶＥＧｅｎｅｓｉＸ”だ!!』
『”ＬＩＶＥＧｅｎｅｓｉＸ”にて私とマリアのコラボユニットが再結成する。当日はテレビ放映もされるから楽しみにしててくれ』
『だが!今日はこれだけで満足出来たかしら?』
「「「「「出来なーい」」」」」
『その心意気やよし!!』
『それじゃこの会場にみんなにもプレゼントだ!!』
『私たちの新たの曲、それは!!』
『『星天ギャラクシィクロス』』
　ＢＧＭ☒星天ギャラクシィクロス☒
◎ｓｉｄｅ　ｅｎｄ◎
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
◎ｓｉｄｅ翼◎

数日前、私は朔弥に呼び出されていた。
「どうした朔弥?」
「実は翼のバースデーライブの日なんだけど、いけなくなっちゃった」
「あれでしょ?ほかのみんながライブに来れるようにって」
「あはは、ばれてるか?」
「何年貴方の従姉妹やってると思ってるのよ?」
「確かに、そんなわけで渡したいものがあるんよ?」
「え?」
　朔弥の用事はこれだったのだろう?
「早いけど誕生日プレゼント」
「これは…」
「気に入ってくれた?わがままを言えるなら常につけててくれると嬉しい」
「さすがに常には恥ずかしいけど、必ず持ち歩くし大事な時につけさせて貰うわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「「「「「アンコール!アンコール!」」」」」
　会場の観客からのコールが聞こえる。
「朔弥、今がつけるときだよね?」
　そこにあるのはイヤリング…剣を模した形をしている。
『この剣はたとえ困難に見舞われても道を切り開く力をくれる物だ!』
「ええ、行こう朔弥!私の最高のステージへ」
　そうして私はそのイヤリングを付けステージに戻っていく。
「みんな!ありがとう!! さあ、アンコールも飛ばして行くぞーーーーー!!」
「「「「「オオーーーーーーーーー!!」」」」」
　この日のライブはとても盛況だった。
　後日、朔弥が一人でＡＧノイズと戦っていたと知ったみんなに心配されてり怒られたりしている姿が見られたが…

「翼！助けて!!」

「朔弥、私のためとは言え何て無茶をしているんだ！」

「ぎゃー！翼も説教組だった!!」

そう言って逃げ出す朔弥。

「ありがとう」

きっと、聞こえないだろう感謝を言葉にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ムラクモ…　ケイショウ」

「イソゲシカクシャ、ヤツラノコウリンハマモナクダ」

戦姫絶唱シンフォギア編

第1話

僕は絶望の中にいた。辺り一面は灰の海・・ それは突如現れた異形による浸食。だが僕は逃げ出せない。
目の前で少女が胸から血を流す。その光景をただ見ていることしか出来ない。
「Gatrandis babel ziggurat edenal―」
歌が聞こえる。
「Emustolronzen fine el baral zizzl―」

悲しい歌が・・・
「Gatrandis babel ziggurat edenal Emustolronzen fine el zizzl」
その歌が終わった時、突如眩い光と衝撃が絶望を支配する。
そして僕は暗闇に落ちていく。
・・・・・・・・・・・・・・・

―一時間前―
「さく兄ちゃんはツヴァイウィングの事詳しいの?」
そう聞いてくる少女の名前は《立花　響》
幼い頃親友の妹の親友という出会いをし、そこから遊ぶようになった。いわゆる幼馴染というやつである。
「聖夜や未来ちゃんなら詳しいんだろうけどな~僕だって聖夜が誘うから行くぐらいで普段は興味もなかったし・・」
「だよねー・・ 未来が折角だから行ってきてって言ってたから行くぐらいだし」
そういってため息をつく響・・ それにつられて僕もため息をつく。
そして現状の原因を思い出す。

◎
「朔弥！ツヴァイウィングのライブチケットが四人分取れたぞ！これで約束道理来てくれるよな？」
そう言ってきたのは《小日向　聖夜》
小学校で隣の席だった聖夜に話しかけられて以来何かと遊ぶようになり、気づけば高校すら同じな親友だ。
「良く取れたな・・・　ただでさえ高倍率だったのに四人分取ってくるんだからな」
「褒めんなよ～照れるだろ？」
「褒めてない、呆れてるんだ。僕や響ちゃんは興味ないのに君たち兄妹が全員分取れたら行くように勝手に約束したんだろ？」
「でも来てくれるんだろ？朔弥は口約束でも律儀に守ってくれるからな。それに絶対後悔させないかよ！」
◎
「とか言ってたやつが家庭の事情で行けなくなってるんだからな・・・」
「まあ折角もらったんだから行かないと損だよ！ほらさく兄ちゃん、席ついたよ。」
そうしてチケットに記された席に到着する。周りを見ると既に熱気が伝わってくる。なんとも言えない場違い感を感じながら席に座る。
それから少しするとツヴァイウィングの二人がステージに上がってきて歌い始める。その歌声を聞いて響は衝撃を受けていた。
「すごい！これがアイドル・・・　これがツヴァイウィングなんだ！」
そう言って目を輝かせる響を見てこれだけでも来て良かったと思う僕がいた。この後ファン化した響と小日向兄妹が盛り上がるんだろうと想像して苦笑していた。この日が僕と響の運命を変えるなど考えることもなく・・・
◎
何曲か聴いて僕なりに楽しんでいた。そこに突如爆発が起きる。
「キャー!!ノイズよー」
誰かが叫ぶ！ノイズと自然災害の一種・・・　突如異形の怪物が現れ

人間を灰にする。そんなふざけた災害だ。まさかこのライブで発生するとは思っていなかったが・・・ そしてそれは周りの人たちも一緒だろう。当然パニックになる。
「さく兄ちゃん、どうしたら・・・」
　響きが不安そうな顔で話しかけてくる。正直僕自身もパニックに陥っておりどうしたらいいかわからなかった。そこに我先にと逃げようとする人の波に飲まれ、響と離れ離れになる。
「響ちゃーん!!」
「さくにぃ・・・・・・」
　それからパニック状態の人波から何とか脱出すると広い場所に出る。周りを見ると一面灰だらけになっている。
「響ちゃーーーん、何所だーーーーー!」
　たまらず叫ぶ。それがノイズを呼び寄せるなど考えずに、
「え、うっうわーーー」
　軽率なこうどうによりノイズに囲まれる。
（あっ・・・ 終わったはこれ）
　そうして周りを見てすでに積んでいる事を理解する。すると何故か頭がクリアになり視界の情報を必要以上に集めてしまう。そして見つけてしまうのだ。自分が探していた少女が胸から血を流し倒れている。そしてそんな彼女を抱える不思議な恰好をした女性。その女性は立ち上がると歌い始めた。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ―」
「奏!ダメーーー!!」
　そんな歌を止めようとする声が聞こえる。
「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ―」
　だが歌は止まらない。そして僕の周りのノイズも襲い掛かろうと動き始める。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａ

l　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｚｉｚｚｌ」

歌が終わると辺り一面が光と衝撃に包まれる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん・・・」

気を失っていたのだろうか?ここがどこだかわからないが体中から痛みを感じる。

「ここはどこだ?」

周りを見回すが真っ暗でよくわからない。

「僕・・　死んだのか?」

最悪の想像をする。

「イイヤ、イキテルゼオマエ!」

「ふぇ!」

まさか返事があるとは思わず変な声を出してしまう。

「ハハハ、ヘンナコエダシテルゾ!ニンゲン」

気のせいではなく、しっかりと声が聞こえてしまった。正直恐怖しかないが声の主に話しかける。

「お前なんなんだよ!?姿を見せろよ!」

「ワガナハ《ギャラルホルン》ソラノヤクサイトカカンゼンセイイブツトイワレテイタ」

なんと名前まで教えてくれたが、結局解らない事しか解らない。

「えっとーー、ここはどこだ?」

とりあえず質問してみた。

「ワレガニンゲンノチメイヲリカイシテイルワケナイダロウ」

「ですよねー」

当り前な返事に落胆しつつ、質問を続ける。

「お前はなんでここにいる?なんで僕に話しかけた。」

「ニンゲンガハコンデキタガタメニココニイル、オマエニハナシカケタノハオマエガシカクシャダトカンジトッタカラダ」

資格者?それは何なのだろうかと疑問に感じていると《ギャラルホルン》から話しかけてくる。

「シカクシャトハワレヲニクタイニヤドスコトガデキルモノノコトヲイウ」
「は?体に宿す?」
「ソウダ」
「ふ、ふざけるなよ!なんでよく解らないものを…」
よく解らない物を体に宿すなどありえないと否定しようとする。
「モンドウムヨウ」
と否定する間もなく体は異物感に苛まれる。
「ぐ、グゥ… ガァァァァァァァァ!!」
異物感と激痛が走り、気を失ってしまう。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
頭の中に様々な光景が浮かんでは消えていく。そして最後に響の絶望した顔と共に目を覚ます。
場所は相変わらず暗闇… だが頭はスッキリしており、体の痛みも消えていた。そして理解していた。
「《ギャラルホルン》お前が何かわかったよ。俺に何をさせたいのかも。」
ギャラルホルンの資格者にされたからか理解する。こことは違う平行世界の結末たちを
「ナラバサクヤヨ。」
「言わなくてもわかってる。」
《ギャラルホルン》が何か言おうとしたがすでに理解しているため遮る。
「僕が響ちゃんを導くよ。彼女が絶望しない未来に… それが最後の世界であるここを守る唯一の手段だから」
これから綴られるのは《立花　響》と《シンフォギア》の物語だ。
だが、それと同時に僕… 《先導　朔弥》と《フェアリーシールダー》の物語だ。

第2話

朔弥はギャラルホルンの資格者として適合した。その結果この世界が唯一残された世界であることを知った。

「世界の現状は理解したけどさ。今の僕の現状はわからないのか？」

現状この暗闇の場所が何所なのか？どうすればいいのかを確かめるべく自分の中のギャラルホルンに話しかける。

「ユウゴウマエニモイッタガ、ニンゲンチメイナドワレガシルハズナイダロウ。」

「だよな～、どうしたものか・・・」

「ダガ、オマエガドウヤッテココニキタカハワカルゾ」

「は？・・・ はーーーーー!?お前それを先に言えよ！」

思わぬ回答に問い詰めようとする。

「キカレナカッタカラナ」

「あ～、確かに聞かなかったよ。うん。でもそこはほら上手く汲み取ってくれるとかさ」

「バラルノジュソ」

「は？急になんだよ？」

「シカクシャデアルガユエニイシソツウヲカノウトシテイルガ、シンニカクセイヲハタサネバワレハオマエノコトノハハシンニハリカイデキヌ。ソシテオマエモワレヲシンニハアツカエヌノダ。ソレラノカイホウノサマタゲコソ《バラルノジュソ》ナノダ」

《バラルの呪詛》聞いた事もない言葉と、それが原因でうまく言葉が理解できないと語るギャラルホルン。だが、そういう事ではないのだ。現に話は通じてる。これ以上何を求めているのか？

「そのバラルの呪詛ってやつでうまく通じないのは解った。それで僕はどうやってここに来たんだよ？」

とりあえず話を戻そうと考え、質問する。

「オチテキタノダ」

「どこから？」

「ウエカラダ」

「上から・・・」
上から落ちて来たという言葉で思い出す。ライブ会場での光と衝撃を・・・
「つまりあの衝撃に巻き込まれてたまたまここに落ちて来たのか？」
「タシカニツヨイチカラヲウエカラカンジテスグニオマエガオチテキタナ」
結論・・・ ここはライブ会場の地下だという事が解った。だが、場所が解れど以前暗闇の中であるため、出口は解らない。
「さて、どうしたものか・・・」
出口を探そうにもどうにも出来ない状況、さてどうしたものかと考えだそうとする。
『なら飛べばいいよ』
「そんな事が出来るならとっくに・・・ 今の声誰？」
突如聞こえた声に反応し誰なのか聞いてしまう。
『私？そうだな～、《ティターニア》なんてどうかな？』
そんな回答と共に目の前に光があふれ、人の形を作っていく。そうして現れたのは
白いローブをまとった女性だった。しかしその顔に朔弥は驚愕する。
「響ちゃん？」
髪は白銀、瞳は青く輝いている。しかしその顔立ちはどうしようもなく響だった。
『その方は思い人？残念ながら私はあなたが言う「響ちゃん」ではないの。ごめんね』
「いや、謝る必要は・・・ それでティターニアさんでしたっけ？なぜここに？あとなんで響ちゃんと同じ顔なんですか？」
《ティターニア》と名乗る女性に質問を投げかける。
「ヤツハホシノカイタクシャ、オオカタシカクシャヲミツケタワレヲショウキョデモシニキタノダロウ？」
ティターニアへの質問になぜかギャラルホルンが答える。
『無粋ですよ《空の厄災》、私は貴方の資格者と話しているのです。』

「星の開拓者？消去？おいおいどういう事だよ？」
『一つづつ、お話ししましょう。ですので空の厄災は黙っててください
ね。』
　そういうとティターニアは一つ咳払いをする。
『まずは貴方がその身に宿したもの・・・ それは《空の厄災》あらゆる平
行世界を飛び回る方舟。あらゆる平行世界をむさぼり喰らう龍。そ
れがギャラルホルンの正体です』
　ギャラルホルンの正体について話すティターニア、だが疑問に思
う。ギャラルホルンは世界を守れと伝えてきていた。
『疑問に思うのも仕方ないでしょう。空の厄災との融合に際し、希望
の担い手を守れと刻まれたのでしょう？』
「ああ」
　希望の担い手が響の事を指していると考え頷く。
『空の厄災は一度希望の担い手によって鎮められました。それ以降希
望の担い手とその友達を運ぶ方舟を担ってきました。ですが、希望の
担い手は《時の厄災》と《陰の厄災》を鎮め、絶望しました』
「絶望・・・ その時と陰の厄災？を鎮めたのにですか？」
『ええ、二つの厄災を鎮めた瞬間に観測が困難となり、絶望の感情のみ
が伝わった後にその世界は消滅したのです。そこからはまるで他の
世界が最初の消滅世界に吸い込まれるように消滅していきました。
そうして残された唯一の世界がこの世界・・・ はじまりの世界なので
す』
　響が絶望したことで世界が滅びた事、そこまではギャラルホルンか
らの知識で理解していたが突然出てきた重要な事実に気がつく。
「はじまりの世界？」
『そうです。この世界こそ〝はじまりの世界〟すべての平行世界はこ
こ起点に紡がれていました』
「この世界が・・・」
『故にこの世界が守られれば必然、他の平行世界も守られる。ですが、
この世界にのみ存在するイレギュラーが存在します。それが資格
者・・・ つまりあなたです。先導朔弥君？』

「僕がイレギュラー？」
『厄災を纏う者は本来現れてしまえばそこからすべてが崩壊するのです。』
　本来なら僕がいる時点で全てが終わっている。そう言われ気持ちが落ち込む。
『落ち込むのはまだ早いですよ？私はそんな貴方に可能性を授けに来たのですから。』
「可能性・・・？」
『はい！今から貴方には二つの道があります。ギャラルホルンも言っていましたが、私は星の開拓者と呼ばれる一族・・・ 聖遺物の作成も破壊も思うがままです。ですので選んでください。体内のギャラルホルンを破壊して普通の人間として生きる道。こちらを選べば力を得る事はないでしょう。ですが、貴方が諦めなければ神様も知らない光を見せてくれる可能性がある・・・』
　資格者として融合して直ぐにそれをやめる道を提示される。そしてだとしても希望があることも告げられる。
『そしてもう一つ・・・』

・・・

「おい！朔弥、俺はともかくってなんだよ。こんな扱いなら響の方行っとけば良かったぜ」
　聖夜の言葉で思い出す。響が胸から血を流して倒れていた光景を・・・
「そうだ響ちゃんは？胸から血を流して!!」
「落ち着け朔弥！響は無事だ。胸に何かの破片が刺さってたらしいが生きてる。破片も取り外せてるらしい。だから安心しろよ。それに俺の自慢の妹がそっちには行ってるからな」
　聖夜の説明を受けて落ち着きを取り戻す。
「そうですよ。聖夜先輩はともかく未来ちゃんはとてもしっかり者ですからね。心配いりません」
「鴉葉・・・てめえも俺の扱いを蔑ろにするのか？」
「まあまあ、落ち着けって！りんご食べろよ。」
「それ俺が持ってきたお見舞いだからな!?」
　こうしてみんなで笑う。これが今の僕の日常・・・この日常は僕が退院した時一変する。

そう《ツヴァイウィングライブ事故の生存者狩り》よって・・・

第3話

ツヴァイウィングのライブで起きた事故、認定特異災害《ノイズ》の大量発生は、死者、行方不明者の総数【１２８７４人】にのぼる大惨事となった。しかしノイズによる死者全体の１／３程度であり、残りは逃走中の将棋倒しによる圧死うあ、避難路確保を争った末の暴行による傷害致死がほとんどだった。また、この事故によってツヴァイウィングの〝天羽　奏〟の死亡はニュースでも大きく取り上げられることとなる。

・・・

「おう。今日は任せた。明日は任せろ！」
そうして僕は聖夜と分かれて家に帰る〝ふり〟をする。
・・・

「おい！さすがに家にお邪魔するのは・・・」
「両親には事情を話したうえで了承をもらってます。なので心配いりません。」
「いやそういう問題じゃあ」
「問答無用ですよ！」
　と強引に招き入れられる。そうすると鴉葉家の皆さんは僕を温かく迎え入れてくれた。もう得られないと思っていたぬくもりに思わず涙した。
・・・

返答は朔弥さんには人間でいて欲しいです。身勝手と言われようとこれが私の気持ちです。」
「鴉葉、違うな・・・ 桐花！僕は」
　言葉を紡ごうとしたその時、黒い何かが彼女の胸を貫く！
「へ？」
　とそうして桐花は自分の胸を見る。その顔はどんどん恐怖へ染まっていく。
「桐花ーーーーー!!」
　急いで駆け寄ろうとするが、それを見ていたのか黒い何かは・・・
「キヒヒヒ

「朔弥さん…　逃げて……　あんな化け物には勝てない……
私の事はもう良いから生きて！普通の人間として……」
「化け物とは失礼だな～私には《イブ》っていうアヌンナキから頂いた素敵な名前があるんだよ？それに私より彼の方が世界にとってはよっぽど化け物だよ？」
　黒い何かが何を言っているのか解らない。ただやつを殺してやりたいという黒い気持ちがどんどんこみ上げてくる。そして抱えている桐花を地面に寝かそうとする。だが彼女は最後の力を振り絞って僕と唇を重ねる。
「ん、と、桐花？」
「約束して朔弥さん、怒りを行動の理由にしないで？私は貴方の優し所を…　誰にでも手を差し伸べることが出来る所を好きになったんだから……　お願い」
　その言葉を最後に鴉葉桐花の命の灯は消える。
「あ、ああ、あああああああああああああああああああああ」
　泣いた。目の前に敵がいるのに見っともなく泣き叫んだ。
「アハハ！残念だったね。空の厄災。彼女の遺言通り普通の人間を選ぶなら多分もう会うことはないよ。それじゃ！」
「待てよ！」
　今にも姿を消そうとしていた黒い何か…《イブ》に対して静止の声をかける。
「何かな？」
「お前は僕の敵だ！」
「君が今のままならそうだね？でどうする？」
「怒りで動くなと言われた。だから僕はお前を殺さない。でもお前は僕が倒す」
「言ってる事めちゃくちゃだよ？頭大丈夫？」
「ああ、怖いぐらい冷静だ」
　そうして思い出すのはティターニアとの話。

・・・

のだ。
「正直僕もよくわかっていない」
「そんな奴に負ける私ではない！」
イブはそういうが早いか手らしき物を伸ばしエネルギー弾を作り出していく。
「これで終わりだ！人間ーーーー!!」
「遅いよ！Ｉｎｎｏｃｅｎｔ（純白）の Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（撃槍）」
イブのエネルギー弾が打たれるよりも早く必殺の一撃を叩き込む。
「馬鹿な私が厄災なんかに・・・」
そう言葉を残し《イブ》と名乗った黒い何かは消滅した。
「ごめん。約束守れなかった」
初戦闘の疲労なのか朔弥は意識を失ってしまう。そんな彼?を囲む黒服の集団に気づかずに・・・

・・・

第４話

「Ｉｎｎｏｃｅｎｔ（純白）　Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（の激槍）」

「無想三刃」

僕と風鳴翼の一撃がぶつかり合う。ここは《特異災害対策機動部二課》・・・ いわゆる対ノイズの特殊部隊との事だ。そのトレーニングルームにて僕はあの風鳴翼と何故か戦っている？練習試合？違います。真剣勝負なんです！どうしてこうなったのかは数時間前まで遡る。

・・・

の時必殺となる一撃を放った?それは間違いなく相手を屠るにたるのだから、やはり僕は怒りで力を使ったのだ。
「そう考えると元に戻れない事が僕への罰なのかな?」
　そう考えていると、白い空間に四角い穴が開く。いや扉が開いたのだろう?こちらからは開けれないようになっていたようだ。
「どうやら目を覚ましたようだな」
　その扉から現れたのは赤い髪、赤いシャツ、筋骨隆々の大男、その纏う雰囲気はとても落ち着いたもの。まさしくオトナだ。
「えっと、貴方は?」
「俺は《風鳴弦十郎》、君をここに連れて来た責任者だ。さて、君の名前を教えてくれないか?」
「僕は先導朔弥です」
　そう答えると相手は数秒耳についてインカムだろうか?の声を聴く。
「確かに先導朔弥という人物は存在している。そしてそれは君の倒れていた公園に君が現れる前までいた事が監視カメラからも確認できている。だが強い光でカメラの映像が途切れた後映し出された映像には君が倒れているだけだった」
「そんな!桐花は?彼女もそこにいたはずなんだ!」
「落ち着き給え、カメラが途切れている間に我々が現場に向かったがその際にも君以外はいなかった」
「あ、あーーーーーーー、桐花ーーーーー」
　それから僕は生死不明となった桐花を思い涙を流した。風鳴弦十郎さんはそれを黙って見守ってくれていた。
　それから少しして落ち着いた僕は弦十郎さんと話をする。
「なるほど、つまり君はそのフェアリーシールダーという異端技術によってその姿となり戻り方が解らないと?」
「はい、簡単に説明するとそんな感じですね」
「うむ。少し困った事態になったな。君の親御さんに説明するにしてもそのまま伝えるわけにもいかない」
「少なくとも義母は喜ぶでしょう。邪魔な僕はいなくなったんだ

し…」
「だとしても、君のお父君は悲しむだろう」
「それは… ですがこの姿で父に会いたくないです。この姿は僕の罪そのものだから」
「それは、いや何も言うまい。ならばこちらで今の姿に合わせた戸籍を用意しよう」
「そんな事が出来るのですか?」
目の前の男は僕の話を聞いた上でこの姿を容認し、戸籍まで用意するといったのだ。
「貴方は何者ですか?」
「ああ、言っていなかったな。ここは《特異災害対策機動部二課》ノイズと戦うための組織さ」

◎

そうして僕は特異災害対策機動二課の施設を案内されていた。戸籍の容易に際して出された条件は
〝異端技術に対する情報を口外しない事〟
〝二課の職員として働く事〟
である。つまり僕はこの組織の飼い犬というわけだ。だが元に戻れない以上仕方がない。そうして僕はこの組織所属となった。
「そしてここがブリーフィングルームだ。今ここに主な主要メンバーを集めている。ここで自己紹介何かをしてもらうからそのつもりでな」
「わかりました」
少し緊張しながら中に入っていく。
「みんな集まっているな?今日から二課所属となった〝風鳴〟朔弥だ!」
「へ?」
素っ頓狂な返事をしてしまう。聞いていない。姓が〝風鳴〟に変更になるなど聞いていないのだ!

「どうした朔弥君?・さっき言ったように自己紹介をしてくれ?」
　この人解ってやってるのか?・真面目になのか?・正直顔を見ただけでは解らない。そのため、仕方なく言われたように自己紹介する。
「風鳴朔弥です。今日から二課でお世話になることとなりました。よろしくを願いします」
「この子は該当する戸籍もなくてな。とりあえず俺の養子とすることとなった、よろしく頼む」
　そう弦十郎さんが話すと皆拍手で迎えてくれた。一人を除いて
「ではこちらの紹介といこう。まず改めて俺は二課の司令を務めている風鳴弦十郎だ、よろしく朔弥君。さて次は〝緒川〟」
　弦十郎さんに呼ばれ前に出てくるのはスーツの男性
「《緒川　慎次》です。主に調査部をまとめるエージェントです。よろしく朔弥さん」
「よろしくお願いします。緒川さん」
　そうして握手すると次の人が現れる。
「《藤尭　朔也》漢字は一文字違うけど君と同じ名前だ。よろしくね。僕はここのオペレーターの一人だから困ったことがあったら相談してくれ。」
「よろしくです。藤尭さん」
「次は私ね。《友里　あおい》です。藤尭君と同じくオペレーターを務めてます。よろしくね」
「はい、お願いします。友里さん」
　そうして一人一人紹介されていく。そんな中一人の女性がカメラ片手に近づいてくる。
「よろしく朔弥ちゃん。〝天才〟考古学者にして〝櫻井理論〟の提唱者こと《櫻井　了子》とは私の事よ!・貴方の纏う力、ぜひとも研究させてほしいわ?・さあ記念写真撮りましょう。私たちの出会いにはいチーズ!」
　そうしてまくし立て写真まで撮る良子さん
「よ、よろしくお願いします。」
　苦笑いしながら答える。そして最後の一人となった。

「……」
「えっと、風鳴翼さんですよね？アイドルの」
「ここではただの防人だ。朔弥と言ったか？私はお前を認めない！」
そう一方的に突き放される。僕は彼女に何かしただろうか？
「トレーニングルームに来なさい。そこで貴方は不要という事を教えてあげる」
そういって出ていく翼さん。どうしたものだろうか？
「朔弥君、翼の相手をして貰えないだろうか？」
「へ？」
弦十郎さんからの申し出に驚く。この人はむやみやたらに争わせる人ではないと思っていたからだ。
「翼は大事な相棒を失って一人何とかしようと無茶を繰り返している。君自身もその力を罰ととらえているだろう？まずは二人のわだかまりをどうにかする、それが二人ともが前に進むのに必要だと思ってな。頼めないか？」
この人はどこまで考えているのだろうか？この人の話を聞いて了承するように僕はトレーニングルームに向かう。
「待っていたわ。さあ始めましょう？」
「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ」
「わかった」
「Ｃｈａｎｇｅｌｉｎｇ（疾走せよ）　Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（妖精の槍）」

そうしてお互いに鎧をまとう。
「私が纏うは〝シンフォギア〟《天羽々斬》我が刃の錆となれ」
「僕が纏うは〝フェアリーシールダー〟《アロンダイト》僕に付いて来られるかな？」
そうして二人は駆け出し、激突する！
・・・

「一人では強くなれない！僕はそれを友に、そして愛した子に教わった！僕の力はそんな人との約束を破った物だ！だからこそ！貴方には進ませない!!一人になるのが強さなんて言わせない！」
剣と槍が激突していく、二人はお互いの思いをその刃に乗せぶつけていく。
「私は弱い、だから周りに守れれて！大切な人がいなくなる。もう奏のように失いたくないんだーーー!!」
「僕は約束を違えた！でももう間違えない。その為に貴方にこの一撃を届かせる!!」
翼は上へと飛び上がり、剣を巨大化させていく。
「喰らえ！朔弥!!」
「天ノ逆鱗」

それに対して僕は槍の先端にエネルギーを集め、螺旋状に回転させていく。
「貫け！」
「Ｓｐｉｒａｌ（螺）（旋）　Ａｒｏｕｎｄ（の）ｄｉｇｈｔ（撃）（槍）」
二人の一撃が炸裂する。そのエネルギーの余波により爆発が発生し、周囲が煙で見えなくなる。その光景を弦十郎たちは見ていた。
「朔弥君！翼！」
心配の為声をかける。だが返事はなく煙が晴れると、二人共が鎧が解除され倒れていた。

・・・

だからなのか自分が未熟だからなのか力加減が解らなくて」
「なら、また私と手合わせしましょう?今度は貴方の力加減の調整の為にね」
　と優しい笑顔で笑いかける翼
「ありがとうございます。翼さん」
「翼で良いわ。同い年だし、私はすでに呼び捨てにしてしまってるしね。あとはその・・・ 書類上は一応従姉妹になるわけだしね」
「・・・ そうで・・・ いや、そうだね。よろしく翼!!」
　こうして僕と翼に確かな絆が生まれた。
・・・

第5話

◎side響◎

ツヴァイウィングのライブ、そこで私は何かの破片が刺さって生死の境をさまよった。最終的に傷痕は残ってしまってたが命に別状はなく。早く大好きな家族や友達、幼馴染のお兄さん達の元へ戻りたくてリハビリを頑張った。

「なんで先輩が死んでアンタみたいなのが生きてるわけ？アンタが代わりに死んでれば良かったのに！」

私が帰って来た居場所は前とは様変わりしていた。まるで私は犯罪者。明らかに虐められてるの友達だった子は助けてくれない。先生も見て見ぬふりをする。

「何言ってるの!?響が何をしたの！響がどんな思いでリハビリも頑張って!!」

「何？小日向？犯罪者をかばう訳？」

「響は犯罪者なんかじゃない！」

そんな中必死に私を守ろうとしてくれる人もいてくれた。親友〝小日向未来〟

「お邪魔するね、後輩諸君。私の大事な響ちゃんと未来ちゃんにひどいことしてるのは誰かな？」

「貴方はお呼びじゃありません。鴉葉先輩」

「私もあなたには興味なかったから丁度いいね？帰ろう？響ちゃん？未来ちゃん？」

私をいつも気遣ってくれる。〝鴉葉桐花〟先輩

「おう！響？元気してるか？今日も駄菓子屋寄り道していくか？」

「兄さん、甘いの食べ過ぎってお母さんに言われてたでしょ？響をだしにして食べようとしないで？」

「ちぇー」

ちょっとお調子者だけど私にいつもいろいろしてくれるお兄さんの一人〝小日向聖夜〟

「響ちゃん？何かあったら言うんだよ？僕が守るから」

そしてずっと憧れてた、頼りになるもう一人のお兄さん〃 先導朔弥〃

「へいきへっちゃらだよ！だって私の周りにはこんなにもたくさん頼れる人たちがいるんだから」

そうこの人たちがいれば私は大丈夫。どんなにつらいことがあっても耐えられる。

・・・

から、僕はそう信じてるよ。』
「強くないよ・・・ 私はいつも守られてばかりで、さく兄ちゃん・・・ 会いたいよ！助けてよ！」
『でももし、耐えられないと・・・ 挫けそうだと思ったなら、《私立リディアン音楽院》そこに希望を残してるから。』
「私立リディアン音楽院？」
　手紙はそこで終わっていた。早速書かれていた学院を調べる。
「ここって翼さんが通ってる学院？」
　なぜその学院なのだろう？希望とは何なのか？解らない。でも！
「考えてるなんて私らしくないよね？行こう！リディアンに！」

◎ｓｉｄｅ　ｅｎｄ◎
・・・

「Ｗｈｉｒｌｗｉｎｄ（旋風）の Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（激槍）」

翼は逆立ちから回転して足の剣でノイズを切り裂き、朔弥は両手の槍を回転させノイズに切り付けていく。

「千ノ落涙」

「Ｂｕｒｓｔ（連撃）Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（の撃槍）」

続いて２人は飛び上がり、翼は無数の剣を、朔弥は無数の槍を生成しノイズの放っていく。

「翼、決めろ！」

「任された！」

「蒼ノ一閃」

最後に残った大型に向けて翼が斬撃を放ち、ノイズの殲滅を完了する。

「一課の皆さん、いつも迅速な避難誘導とノイズへの対応ありがとうございます」

朔也は一課に向けそういうと敬礼する。翼もお辞儀し２人は撤退した。

・・・

周りでは僕と翼が並んで食堂に来たことで噂になっている。
「翼・・・ オーラ出まくりだってさ？」
「朔弥こそ、人気者だな・・・ 王子様！」
「やめろよ！僕だってどうしてこうなったって思うんだから！」
そう、僕のリディアンの中でのあだ名が〝リディアンの王子様〟。中身が男な僕はなるべく紳士的な行動を心掛けていた。そしたらそういうあだ名が出来ていた。
『ハンカチを落としましたよ？お嬢さん？』
とハンカチを落とした子に笑顔で笑いかけたり。
『こんな沢山の資料を1人で運ぶなんて危ないですよ？手伝いましょう？』
と大変そうな子をさりげなく助けたりしたのが原因ではないだろう？声をかけた子たちの顔が赤み掛かってた気がするがきっと気のせいだろう・・・
そんなやり取りをしていた所に急に立ち上がった生徒と翼がぶつかりそうになる。
「あ、あ、あの・・・」
響である。響は震えながら翼に何か伝えようとするが、翼はそんな響に向けて指で頬を指し示す。そう、響の頬には先ほどから食べていたのであろうご飯粒が付いていたのだ。それに気が付いた響は恥ずかしそうにうつむいてしまう。
「ドンマイ、響ちゃん」
翼が歩き出したので小声で響にフォローを入れ翼を追いかける。
「朔弥・・・ 彼女知り合い？」
「ああ、僕の前の姿での幼馴染だよ」
「あー、手紙を出したっていう？」
「そうそう！」
「彼女は貴方の事は？」
「単なる知り合いの先輩程度だよ？入学式で迷ってるから案内してあげてね・・・」
「わかってると思うけど・・・」

「大丈夫、一般人を巻き込む訳にはね・・・ でも正直辛いかな？本当の事が言えないのは」
「その気持ちもわかるけど・・・ 手紙を出した後叔父様に色々言われてたでしょ？」
「うん、まさしく一般人を巻き込むなー！って怒られました」
「なら、今の関係で満足しときなさい」
そう、僕は響が今後シンフォギアを纏うのを知っているが他の二課のメンバーにそれを伝えるわけにはいかない為、現状がこうするしかないのだ。
・・・

第６話

◎ｓｉｄｅ響◎

『生きるのを諦めるな！』

あの日、あのとき、間違いなく私はあの人に救われた。

私を救ってくれたあの人は、とても優しくて力強い歌を口ずさんでいた。

「死んじゃうの」

私とノイズから逃げていた女の子は私に向けて不安そうに尋ねてくる。だからは私は優しく微笑み首を横に振る。だがノイズは容赦なく私たちに迫ってくる。

『私にできることを！出来ることがきっとあるはずだ!!』

「生きるのを諦めないで!!」

女の子に、そして私自身に言い聞かせる。そのとき胸の奥が熱くなる。歌があふれ出る。私はこの歌を知らない、でも私の心が歌え！と叫んでる!!だから・・・

「Ｂａｌｗｌｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」

私の胸から光りがあふれてくる。その光が私を包み込み・・・ 収まった時、私の姿は鎧に包まれていた。

ＢＧＭ☒激槍・ガングニール☒

「え・え！なんで、私どうなっちゃってるの？」

「お姉ちゃん、かっこいい」

女の子はきらきらした目で私を見てくる。

『そうだ、なんだかわからないけど、確かなのは私がこの子を助けなきゃいけないってことだよね』

そう思い一歩を踏み出した。その一歩は私が出したとは思えないほどの跳躍となる。女の子を抱えながら高層からの着地をものともしない。

上を見ればノイズも私を追いかけるように落ちてくる。それを避

けると落ちてきたノイズは高速で突進してくる。私はジャンプして避けようとしたが勢いが付きすぎて壁に激突してしまう。そのすぐそばには大型ノイズがその腕を振下ろそうとしておりとっさに壁を蹴り回避する。着地したがすでにノイズが突進しており思わず腕を突き出す。すると私の腕に触れたノイズのみが炭化したのだ。

『え!・私がやっつけたの?・』

自分の拳がノイズを倒した事に驚きを隠せない。だが、大型ノイズが迫ってきていた。

そこにおそらくバイクだろうエンジン音が聞こえてくる。そのバイクはノイズの群れを避けながら大型に突撃し爆発四散した。

「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ」

「呆けない!・死ぬわよ」

「貴方はそこでその子を守ってなさい」

「翼さん?」

爆発の後に聞こえた歌!・そして降りてきた女性はあの〝風鳴翼〟だった。

翼は走り出すと私と似た鎧を纏い剣を手にしており、剣を巨大化させながら前方に斬撃を飛ばしノイズの群れを一掃したかと思えばすでに上におり幾本もの剣を出現させ投下していた。

「すごい・・・ やっぱり翼さんは」

翼はそれ以降もノイズを一掃していく。

「え」

女の子が声を漏らす。女の子の見ている方を向くと大型のノイズがすでに真後ろにまで迫っていた。

「Ｉｎｎｏｃｅｎｔ（純）（白）ｏｆ（の）Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（撃）（槍）」

だが、そのノイズは一瞬にして炭化した。漆黒の鎧を纏った少女の純白閃光によって

「大丈夫だったかい?響ちゃん」

「朔弥さん!?」

その少女は私の学校の先輩〝風鳴朔弥〟だった。

◎ｓｉｄｅ　ｅｎｄ◎

・・・

「まま！」
　響と一緒だった女の子の声を聞き母親が来たのだと一安心する。
「良かった・・・ あの子お母さんに会えて」
「だな、それで響ちゃん？」
「どうしました朔弥さ・・・ もしかして怒ってます？」
「そうだね。それもある・・・ けど、響ちゃんが生きててくれて良かった」
「あ、わた・・・ 私」
　僕は響に近づきそっと抱きしめる。すると不安だったのだろう響は涙を流し始める。
「私、怖くて・・・ でもあの子を守らなきゃって・・・」
「うん、頑張ったね。もう大丈夫だよ」
「う・・・ うっく、うあーーーーん」
「よしよし」
　限界だったであろう響、僕は泣き止むまで抱きしめ背中をなで続けた。
・・・

錠をされる。
「すみません。貴方の身柄を拘束させていただきます」
「え!・え・・・ あの!?な、なんでーーーーーーー!!」
そうして響も一緒に二課本部へと向かった。
・・・

「さあさあ笑って笑って、お近づきの印にツーショット写真！」
「嫌ですよ！手錠をしたまま写真なんてきっと悲しい思い出として残っちゃいます！」
向こうでは了子さんが悲しいツーショット写真を撮ろうとしていた。
見かねた翼が緒川に頼み場を沈めてもらった。
・・・

第7話

響は検査終了とともに寮へと帰宅した。僕と翼はシャワールームにいた。
「良かったの？貴方のこと」
「良いんだよ。僕は2年前に生まれ変わったんだ・・・ それにこんな姿になって今更どう告げるべきかわからないんだよ。僕が〈先導朔弥〉だということも、《鴉葉桐花》の死も」
　そう告げるべきではない。知る必要のない真実ならば
「そういう翼は？思うことあるんだろ？」
「貴方はいつもそう、私の入られたくない心（ところ）に無遠慮に土足で入ってくる」
「あ～なんか悪い」
「別に責めてる訳じゃない、ただそのせいで私弱いままだな～って、どうしても貴方に甘えてしまう」
「そんなの気にするな。従姉妹だろ？僕たち」
「ええ、そうね」
　翼は一度深呼吸をした後僕に告げた。
「ガングニールは奏のギアだ！それを見ず知らずのあの子が纏う・・・それがどうしても許せないの」
「そうか・・・ その気持ちをため込む必要はないと思う」
「え？」
「だってそれだけ奏さんの事が大切だったんだろ？ならそれは否定するな、それでもって響ちゃんが選んだ結果に翼がどんな答えを出すのか？それが重要だろうさ」
「ええ、そうね。まずはあの子の検査結果を待ちましょうか？」
　そうして僕たちもそれぞれの部屋へと帰宅するのだった。

　次の日の放課後、僕と翼は響の教室まで赴いた。
「重要参考人として再度本部まで同行願います」
「ごめんね響ちゃん」

そうして謝って再び響に手錠をかける。
「な、なんでーーーーーー!!」
本部到着後、検査結果が伝えられた。
「初体験の負荷が少し残ってるけども、体への異常はほぼ見られませんでした～」
「ほぼですか？」
不安そうな声を出しているが別のことが気になってしょうがないという様子の響
「そうね、貴方が聞きたいのはこんなことじゃないわよね？」
「教えてください。あの力のことを」
そこからは弦十郎や了子が聖遺物について説明していた。
「欠片に残った力を特定振幅の波動、つまり歌ね？それによって解き放つの」
「そうだ。あの時も胸の奥から歌が浮かんで」
「でもね立花、その歌が浮かんでくるのは誰でも起きるわけじゃない。聖遺物との共鳴といえば良いのかしら・・・ それが出来た物にだけ起こるの」
「そうして纏うのが、アンチノイズプロテクター”シンフォギア”なの」
「そのシンフォギアを纏える物達を俺たちは適合者と呼んでいる」
「それが翼と響ちゃんって事だよ」
「どう？貴方が目覚めた力について少しは理解できたかしら」
だが、響は顔を曇らせ了子に質問する。内容を僕は簡単に察ったが。
「あの、全然わかりません」
「だろうね」
「だろうとも」
友里や藤尭も同意する。響にこんな難しい話が理解できる訳ない。
「いきなりは難し過ぎちゃいましたね～だとしたら、聖遺物からシンフォギアを作り出す唯一の技術〝櫻井理論〟の提唱者がこの私であることは覚えてくださいね？」

「はぁ～でも、私はその聖遺物という物を持ってません。なのになぜ」
そこにモニターからあるレントゲン写真が映し出される。
「これが何なのか、君にはわかるはずだ」
「はい！2年前の怪我です。私もあそこにいたんです」
「心臓付近に複雑に食い込んでいるため、手術でも摘出不可能な無数の破片。調査の結果この影はかつて奏ちゃんが纏っていた第三号聖遺物〝ガングニール〟の砕けた破片であることが判明しました」
「やはりか」
僕もあの場は見ていた、その可能性が高いのはわかっていた。翼は昨日よりも動揺が顕著に出ていた。
「翼、少し外行こうか？」
「ええ、ありがとう」
そうして僕と翼は部屋を後にした。

「翼？大丈夫か？」
部屋を出た後僕は翼に確認をとる。
「わかっていたわ。朔弥が言っていたしね。奏のガングニールだと・・・ あの時は気丈に振る舞えてた。あの子に重荷を背負わせるとも。でもだめだ、私は」
「翼・・・」
そこに扉が開き響が出てくる。
「私、戦います。なれない身ではありますが、頑張ります。一緒に戦えればと思います」
そう言って僕たちに手を差し伸べる。僕は手を取って
「ああ、よろしく響ちゃん」
と答えた。だが翼は俯き、手を出せずにいる。
「翼・・・」
「あ、あの翼さんとも一緒に戦えればと・・・」
そこに警報が鳴り響く、僕たちは急いで司令室に急行した。

「ノイズの反応確認」
「本件は我々二課で預かることを一課に通達」
「位置得手、座標でます」
　そうして中央モニターに地図が表示される。
「リディアンより距離２００」
「近い」
「私と朔弥で迎え撃ちます」
「ああ」
　そうして僕と翼は外へと走り出した。

　ノイズの群れの前に到着すると、奴らは集合し大型ノイズへと変貌する。
「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ」
「Ｃｈａｎｇｅｌｉｎｇ（疾走せよ）　Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（妖精の槍）」
　ＢＧＭ☒絶刀・天羽々斬☒
　僕たちが大型ノイズに突撃すると、やつの頭部に付いていた無数の羽の様な突起が分離してブーメランのように回転して僕たちに飛来してくる。
「Ｂｕｒｓｔ（連撃）　Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ（の撃槍）」

　僕は槍を複数生成して突起をすべて打ち落とす。
「翼!!」
「任された」
　翼は技を放つべく剣を大型に変形させる。
「おおおおお!!」
　そこにシンフォギアを纏った響が大型ノイズに跳び蹴りを放つ。
それによって大型ノイズの体制が崩れた。

「翼さん!!」
翼はとっさ空中に舞い上がり技を放つ！
「蒼ノ一閃」

翼の放った斬撃は見事にノイズを真っ二つにした。そこに響が駆け寄る。
「翼さ～ん！私、今は頼りないかもしれないけれど、一生懸命頑張ります！だから、私と一緒に戦ってください」
「そうね」
翼が返事を返したことで嬉しそうに笑う響。だが、
「貴方と私、戦いましょうか？」
そうして翼は刃を響に向けるのだった。

第８話

「一月立ってもかみ合わんか」
「そうですね～僕とどちらかなら問題ないんですけどね」
「響ちゃんと翼ちゃんが並んじゃうと朔弥ちゃんが間にいても駄目になるのよね～」
　僕たちはここ一ヶ月どうにか連携をとれない響と翼をどうにかしようと努めてきた。だがどうしてもかみ合わない。
「一ヶ月前か」
　そうして僕は一月前の光景を思い出す。
・・・

らんなさい」
「か、覚悟とかそんな、私アームドギアなんてわかりません。わかってないのに構えろなんて、それこそ全然わかりません！」
翼は響に背を向けゆっくり歩きだす。
「覚悟を持たずにのこのこと遊び半分で戦場に立つ貴方が、〝奏〟の何を受け継いでいると！」
「翼、今奏は関係「あるわ、その子が纏う物がガングニールならば!!」待て翼!!」
翼は僕の静止も聞かず空高く舞い上がる。
「天ノ逆鱗」

「それはやりすぎだ！Ｉｎｎｏｃｅｎｔ・・・」
翼の一撃を防ぐべく技を出そうとするが、そこに一人の影が・・・
「おらぁ!!」
拳の一突きで翼の天ノ逆鱗と相殺しあう。
「はぁぁぁぁぁぁ！はぁ!!」
その漢、風鳴源十郎はそのまま刃を砕くに留まらず、周辺の地面すら破砕してしまった。
「あ～あ、こんなにしちまって、何やってんだお前たちは？この靴高かったんだぞ？」
「ごめんなさい」
「いったい何本の映画が借りられると思ってるんだよ」
「いや、父さんの力が出鱈目なだけだって」
「まあ、そういうなって」
そう言って、源十郎は翼に向かって歩いていく。
「らしくないな？翼、ろくに狙いも付けずにぶっ放したのか？」
そこで源十郎があることに気づく。
「お前泣いて「泣いてなんていません。涙なんて流していません」・・・」
「風鳴翼はその身を剣と鍛えた戦士です。だから・・・」
「翼さん・・・」

「翼、今日は家まで送るよ」
そう言って僕は翼の肩を支える。
そこに響が声をかける。
「私、自分が全然ダメダメなのは解ってます。だから、これから一生懸命頑張って奏さんの代わりになってみせます」
〝パチン〟
と音が響く、翼が響きの頬を叩いたのだ。
そうして翼は立ち去っていく。響は何故叩かれたのか解らないのか？それとも涙の意味が解らないのか唖然としている。
「響ちゃん・・・」
「朔弥さん？」
「響ちゃんが壮者として頑張ろうとしてくれるのは嬉しいよ？だから僕は響ちゃんを歓迎する」
僕の言葉に嬉しそうな表情をする響
「だけどね。もしこれからも戦っていくんだとしたら、正直今の心持なら翼に認められることはないよ？」
「え？ど、そうしてですか？」
「響ちゃんさ？翼になんで叩かれたのか、わからないでしょ？」
「そ、それは・・・」
響は顔をうつ向かせる。
「僕が答えを教えるのは簡単だ。でもね。これは響ちゃんが自分で見つけた答えじゃないと、翼には届かないよ？」
そう言った後、僕は翼の後を追う。その場に響を残して
・・・

「どう思う？」
「いっぱいですね？」
「ははは、まったくその通りだ」
　源十郎の質問に対して響が間抜けな回答を返していた。
「これはここ一か月にわたるノイズの発生地点だ。ノイズについて響君が知っていることは？」
「テレビのニュースや学校で教えてもらった程度ですが」
　と前置きをしてかなり詳しく語り始めた。現在の学校のレポートの題材らしい。
　それに補足として了子と源十郎がノイズの発生率の本来の低さ、現状の高さの異常を説明していく。
「詰まる所、何らかの作為が働いていると考えられるわね」
「作為？てことは誰かの手によるものだと言うんですか？」
「中心点はここ、リディアン音楽院高等科・・・ここの真上です。”サクリストD”《デュランダル》を狙って、何らかの意思がこの地に向けられている証左となります」
「あの、デュランダルっていったい？」
　響の疑問にオペレーター陣が答える。
「ここよりも更に下層、〝アビス〟と言われる最深部に保管され日本政府の管理下で我々が研究しているほぼ完全状態の聖遺物それがデュランダルよ」
「翼さんの《天羽々斬》や響ちゃんの胸の《ガングニール》のような欠片は壮者が歌って再構築させないとその力を発揮できないけど、完全状態の聖遺物は一度起動した後は１００％の力を常に発揮し更には壮者以外の人間にも使用できるだろうと研究結果が出ているんだ」
「それが私が提唱した〝櫻井理論〟だけど完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲインが必要なのよね」
「う、う～ん？あの質問いいですか？」
「はい！響ちゃん！」
「朔弥さんは戦うとき歌ってないですけど、完全聖遺物って物何ですか？」

「なかなか鋭い質問だな。朔弥君、返答は君に任せる」
　響の質問に対して源十郎は僕に判断を委ねるようだ。
「そうだね。まず僕が纏ている鎧はシンフォギアじゃないんだ」
「そうなんですか？」
「うん、僕が纏っているものはフェアリーシールダーと呼ばれるもので、力はシンフォギアと同等にあるしシンフォギアのように纏うのに歌は必要ないんだ。その代わりシンフォギアにある〝バリアコーティング〟がないからノイズとの戦闘は一緒に戦うシンフォギア壮者が必ず必要になるんだ」
「だとしても、それならシンフォギア壮者と一緒ならノイズとも戦えるってことですよね？十分すごいと思うんですけど？」
「確かに、フェアリーシールダーは対ノイズに関してはシンフォギアのバディとなれるものだ。だが、それに見合ったデメリットも十分に存在するんだ。まずそうだな・・・ 僕は人間じゃないんだ」
「へ？またまた冗談を「響ちゃん僕の体見たことないよね？」え？ないですけど」
　僕は上着を脱ぎ響に背中を見せる。
「朔弥さん！周りには男性もたくさ・・・ え？」
　響も僕の背中にあるものに気づく
「は、翅？」
「そう、翅だよ。フェアリーシールダーは人間を妖精へと作り変えるんだ。僕は響ちゃんに会ったあの時からずっと人間じゃないんだ」

・・・

その日僕は生徒会の手伝いで入学式の手伝いをしていた。新入生のチェックをしていたのだ。
「朔弥さんお疲れ様。あと何人かな？もうすぐ時間だけれど」
「お疲れ様です副会長。あと２人ですね」
その２人とは、〝立花響〟と〝小日向未来〟だった。あの二人との再開は正直怖いが嬉しくもある。まあ、向こうは僕の事わからないだろうけど。
「響急いで！もうすぐ時間になっちゃう!!」
「待ってよ未来!!」
「お、来たみたいね？」
そうして見えるのは２年で少し身長が伸びたみたいだが、変わらぬ二人だった。
「新入生！もう少しで遅刻だったぞ？」
「すいません。一人が寝坊して」
「はははははは、寝坊ならしょうがない。間に合ってよかったじゃないか」
そういうところも変わってないと嬉しくなり笑ってしまう。
「そんな笑わなくても～」
「そうですよ。朔弥さん！笑い事じゃありませんよ？」
「え？」
「朔弥さん？」
「ん？２人とも知り合いなの？我が校のプリンスに？」
「いえ、初めましてですけど・・・ 知り合いに同じ名前の人がいまして」
「あら？そうなの？」
「ええ、その人は行方不明なんですけどね」
「ごめんなさい」
「いえ、こっちが勝手に話したことですから」
「ありがとう。代わりじゃないけど、こっちの朔弥を好きに使っていいから」
「おい！かってに決めるなよ！はぁ、僕は風鳴朔弥」

「我が校随一のイケメンな為、リディアンの王子様と言われてます。私は副会長の・・・」
「不本意だけどね。よろしく」
「よろしくお願いします。立花響です」
「小日向未来です」
「ああ、よろしく」
そうして挨拶した二人の顔は少しかなしそうだった。

「やっぱ話せないよな」
そうして、歩いていくと見知らぬ少女が目に入る。綺麗な銀髪に目を引かれる。
「何してんだろう?」
何故か気になり、近づいていく。もっと近くで見たくて
〝パキ〟
「誰だ!」
小枝を踏んでしまい気づかれてしまう
「ご、ごめんなさい。その、君が綺麗だからつい近くで見たくて」
そう言って言葉選びに失敗したことに気づく。相手は赤面したかと思うと走って逃げてしまった。
このなんとも言えない偶然の出会いが僕と彼女のファーストコンタクトだった。